

幕末・維新展

展示期間◇平成二十年一月七日(月)〜十一月二十八日(金)

今年の特別展は「幕末・維新展」とした。

蘇峰が所蔵していた幕末・維新の資料や、その時代に活躍した人々の書簡などを展示した。今回の展示目録では、蘇峰著作の『近世日本国民史』『蘇翁感銘録』『我が交遊録』『三代人物史』『吉田松陰』などから、蘇峰の文章を抜粋し、人物の説明に加えた。

① 江戸期の美術品と思想家の書

安藤(歌川)広重(一七九七〜一八五八 寛政九〜安政五) 江戸

江戸後期の浮世絵師。家督を相続し、文化六年定火消同心職につく。十四歳で歌川豊広入門。二十六歳で火消同心を引退し、美人画を主にして画業に専心する。東海道を旅し、風景画、花鳥画に転じ、三十六歳のとき「東海道五十三次」保永堂版を発表し、一躍世に認められた。広重独自のロマンチックな画趣は、「東都名所」「近江八景」などの名作に表れている。

〈展示品〉「水郷堤花見図」(軸物)

葛飾北斎(一七六〇〜一八四九 宝暦十〜嘉永二) 江戸

江戸後期の浮世絵師。十四〜五歳のとき彫刻師某につき木版彫刻の技術を学ぶ。十九歳で本格的に浮世絵を習い役者絵を描く。狩野融川に師事し、狩野派の筆法を学ぶ。また土佐派の画法も学び、司馬江漢などの洋風銅版画にも関心を寄せるなど、当時としては全く破天荒な修業生活を送る。自然と人間との調和を描き、浮世絵史上画期的な意義があった。九十歳で没するまであくなき探究心を燃やした北斎の画風は、ヨーロッパ

パ画壇にも影響を与えた。

〈展示品〉「四季山水」(軸物) (フェノロサによる鑑定)

■北斎と広重(『近世日本国民史』34巻)

幕府末期に於ける北斎・広重の二巨匠に就ては、彼等も固より尋常一様の浮世絵師の爲す所を爲したが、然もそれ以外に彼等は其の生面を開拓している。北斎の生涯は実に長く、宝暦十年本所に生れ、嘉永二年、九十歳にて逝いた。而して其の最後に至る迄、画筆を抛たず、且つ向上精進の心を把持した。(中略) 実に徳川末期に於ける浮世絵界の勇將たるのみならず、絵画界の誉れであり、且つ誇りであると云わねばならぬ。(中略)

広重は北斎に比すれば彼は、やゝ後輩だ。彼は寛政九年、江戸の定火消屋敷の同心安藤徳右衛門の子として生れた。(中略) 彼亦た尋常浮世絵師の経路を辿ったが、然も其の本色若しくは特色を、風景画の中に發揮した。その代表作は実に東海道五十三次である。而して彼は単に風景画家ではない。其の画中に人物を點綴して、風俗画となした。(中略) 天然の中に人間が活動し、人間の中に天然が存在し、天人合致の日本画は殆ど広重の画筆によりて現呈せられたと云うも必ずしも溢言ではあるまい。(中略) 広重は其の意匠に於ても、筆力に於ても、技巧に於ても、到底北斎の敵では無かった。されど彼の審美眼は北斎よりも優美にして且つ雅趣があった。而して北斎よりも人間味が多かった。

奥村政信(一六八六〜一七六四 貞享三〜明和二) 江戸

江戸中期の浮世絵師。奥村派の始祖で、初期浮世絵版画の改良開発に功績をあげた。美人画・役者絵・歴史画・武者絵・花鳥画などあらゆる種類に及ぶ。なかでも(浮絵)と称する西欧の線遠近法を応用した風景版画は独自の境地を開いた。特に美人画に長じ、自らおやま絵師と称した。江戸で本問屋を経営し、自画自刊したことが、版画の改良に役立つ事になった。

〈展示品〉「美人画」(軸物)

江馬細香(一七八七〜一八六一 天明七〜文久二) 美濃国

幕末・維新期の女流画家。美濃国大垣藩の医者・江馬蘭齋の次女。幼くして詩や書画を学ぶ。京都で画の指導をうけ、当時一流の女流南画家として活躍した。詩は頼山陽につき、山陽を介して、京の文人達との交流が始まり、詩画の技を大いに高めた。生涯独身であった。

〈展示品〉「養老之滝」(軸物)

荻生徂徠(二六六六〜一七二八 寛文六〜享保十三) 江戸

江戸中期の儒学者。幼名伝次郎。通称惣右衛門、徂徠は号。父は五代將軍綱吉の侍医であつたが罪あつて、一六七九年追われて上総国本納村に流落。徂徠も同所で過ごし独学した。一六九〇年赦されて江戸に帰り、徂徠は講説を業とした。柳沢吉保に仕官。一七〇九年ごろ日本橋茅場町に護園塾を開いた。朱子学の立場で伊藤仁斎の古学を批判した『護園隨筆』を刊行、一躍名を高めた。『論語』を重視し、六経を軽視した仁斎に反対し、孔子が継承しようとした周以前の古代こそ研究の対象であるとした。『太平策』『政談』を徳川吉宗に献じて経世済民の具体策を示した。

〈展示品〉「徂徠先生印譜」(軸物)

■徂徠学の功過(『近世日本国民史』21巻)

徂徠の学問は、専ら功利一方であつた。彼は道は天地自然のものでなく、聖人が治國平天下の爲めに、建立したるものと説いている。従つて彼は一方に於ては、誠意正心の心術の工夫や、他方に於ては、大義名分の研究を、閑却した。而して此れが爲めに、彼の門下には、豪蕩不羈の士や、詩酒狂逸の徒や、然らざれば現時に即して、殆んど傍若無人の言論を逞うしたる輩さへ生じた。固より此れは、徂徠の本意でなく、寧ろ其の学の悪影響であつた。

林子平(一七三八〜一七九三 元文三〜寛政五) 江戸

江戸後期の経世家・海防論者。名は友直、号・六無齋。ロシアの脅威を説き、海防の必要から『海国兵談』を著し自費刊行したが、幕府から発禁処分を受け、版木も没収されて仙台での塾居を命じられた。不遇のうちに没した。塾居中、その心境を「親も無し 妻無し子無し版木無し 金も無けれど死にたくも無し」と詠んだ。号の六無齋はここからきている。

〈展示品〉「六無齋林子墨竹」(軸物)

■林子平は何故に罪を得たる乎(『近世日本国民史』25巻)

問題は、何故に暴時慨世の一念よりして著述し、刊行したる爲めに、其の板木は取り上げられ、其の著者は塾居申付けられねばならなかつた乎。世には彼と同時に、

工藤平助や、本多利明などが、彼と同様な、否な或る意味に於ては、彼以上の急進突飛の議論を吐き、著述を作しつゝも、其の法網を免れたるを見て、如何にも奇怪千萬の事と做すものがある。然も仔細に看來れば、毫も其間に不思議はない。徳川幕府は、必ずしも言論の自由を、絶対的に拘束するものではなかつた。將軍若しくは当局者に向つて、意見を上申するの道は、必ずしも絶対に閉鎖されていなかつた。(中略) 子平が若し之を定信、若しくは其の同僚に建白するに止つたならば、決して其身を禍ひす可き筈はなかつた。然も禍因は著述よりも、寧ろ著述其物の宣伝であつた。子平は之を当局者の内聽に達して止むを肩とせず、白昼公然天下に向つて、大聲疾呼した。

頼山陽(一七八〇〜一八三二 安永九〜天保三) 大坂

江戸後期の儒学者。安芸国広島藩儒頼春水の長男。別号三十六峰外史。十八歳で江戸に出て尾藤二洲の塾に学ぶが翌年帰郷。学問を好み博識、そのうえ詩文をよくしたが、性格は豪放・奔放で遊蕩の日々を送り、二十一歳の時出奔して罪を得る。自邸内に三年監禁され、その間読書にふけり文章を書き『日本外史』の草稿を作つた。二十九歳のとき備後国神辺の菅茶山に招かれ、塾(廉塾)の塾頭となる。三十一歳で大坂、ついで京都に出て車屋町に居住し子弟を集めた。多くの文人・学者と交わり、特に大塩平八郎らと親交があつた。大塩の本には序文をよせたりしている。晩年肺を病み、講義に出かけた彦根で咯血し京都に帰り没した。代表作『日本外史』は一八二七年(文政十) 松平定信に献じたものである。

〈展示品〉頼山陽書簡(巻物)

頼山陽が四十八歳文政十年五月二十五日に菅茶山に宛てた書状。

序に松方正義の書「忠憤著書」、後には蘇峰の書「忠孝伝家」がつけられ、一巻の巻物仕立てとなつている。

*菅茶山(一七四八〜一八二七 寛延一〜文政十) 江戸中・後期の儒学者・詩人。太仲とも称す。備後の農家に生まれる。諸生を教授した。晩年の入塾は増加を極め、藩に願ひ出て郷校として廉塾と名づけた。

■頼山陽の史論(『近世日本国民史』29巻)

頼山陽は、時代の精神を作つたと云わんよりは、寧ろ時代の精神に作られたと云ふべき人だ。(中略) 頼山陽は復古派の勇将であつた。彼は現状に不服と云わんよりは

も、寧ろ過去を愛慕した。彼の此の愛慕的感情が、彼の詩となり、彼の歴史となり、彼の史論となり、而して又た彼の文章となり、期せずして天下の人心を鼓吹した。彼の日本外史が、佛國革命に於ける、ルソーの民約論と、同様の効果を、維新回天の事業に与へるとは断言しない。されど彼の外史が、感激を以て、識者階級に愛読せられたことは、松平定信の日記に、定信が読み来り読み去りて、巻を措く能わなかったと誌したことを見ても判知る。而して通俗文学者の巨魁とも云う可き曲亭馬琴が、特に日本外史の型紙を制して、之を謄写したるを見て判知る。

② 吉田松陰とその周辺の人々

吉田松陰（一八三〇—一八五九 天保一—安政六） 長門国萩幕末期の勤王派志士・思想家・教育者。幼名虎之助、通称寅次郎。別号二十一回猛士。吉田家は代々山鹿流兵学師範であつた。九歳で藩校明倫館に出勤して教授見習いとなる。玉木文之進が松本村新道に住し松下村塾をおこすと、一八四五年（弘化二）より指導をうける。一八五一年兵学実地研究のため東北旅行をし、その後各地を遍歴して見聞を広めた。一八五四年下田に行きアメリカ船に乗組もうとして失敗し、捕えられて幽閉された。野山獄に移され翌年免獄された。一八五七年藩の許しを得て松下村塾を開き、門人の育成に努力。兵学・儒学を講じ時事を論じたが、そこでの教育は詩文を排し、名利のための学や顧問の学を否定し、述志の人生の学を説いた。間部詮勝要撃を策して安政の大獄に連座、再び幽閉され、江戸伝馬町に入獄、その獄中で『留魂録』を著す。一八五九年（安政六）獄中で刑死。門下生には高杉晋作・久坂玄瑞・木戸孝允・伊藤博文・山県有朋らがいる。

■ 誰ぞ吉田松陰とは（『吉田松陰』初版 明治二十六年発行）

三十五年前、日本国を荒れに暴らしたる電火的革命家も、今は此に鎮座して、静かなる神となり。春雨秋風人の訪うなく、謾々たる松聲は、日本男児の記念たる桜花の雪に和して吟し。唧々たる蟲語は武蔵野の原より出て、原に入る明月の清光を帯んで咽う。未死の幽魂、尋ねんと欲するも、今何の処にかある。請う吾人をして彼を九原の下より起し、少しく彼に就て語らしめよ。（中略）

彼は多くの企謀を有し、一の成功あらざりき。彼の歴史は蹉跎の歴史なり、彼の一代は失敗の一代なり。然りと雖彼は維新革命に於ける、一箇の革命的急先鋒なり。若し維新

革命にして伝う可くんは、彼も亦た伝えざる可らず。彼は恰も難産したる母の如し、自ら死せりと雖、其の赤児は成育せり、長大となれり。彼れ豈に伝う可らざらんや。

〈展示品〉松陰直筆「三餘説」（色紙 21.5cm×19.5cm）

昔董遇謂 讀書當以三餘 冬者歲之餘 夜者日之餘 陰雨者時之餘 然歲之有冬 日之有夜 時之有雨 皆天道之常 未足以為餘也 吾入獄來 亦得三餘 以讀書 謂 己失義於忠孝義 尚仰食於家國 非是君父之餘恩邪 己幽身於陰房 尚取照於戸隙 非是日月之餘光邪 性己狂悖 多犯大典 質又匪弱 教羅篤疾 有一千此 皆足以殺身 而方且仰餘恩 取餘光 非是人生之餘命邪 凡此三餘者 皆董遇之所無 而吾獨得之 雖沒身足矣 抑董遇或為農 或為官 徒得其三餘 猶足以傳於天下後世 況吾得我三餘 寧可量哉 松陰生稿

（大意）

昔、董遇（三國魏の学者。讀書百遍意自ら通ずと言つた人）が、讀書は三つの余暇にすべきだといっている。冬・夜・雨の日と。しかしこの余暇は天道の常であり、これは余とは言えない。私は獄に入つて私流の三余を得て、讀書をしている。それは君父の余恩と、戸隙からの日月の余光と、病身にある余力とである。董遇は農業をなし、官僚となり、その上三余を得ている。その三余が天下後世に伝わっている程、価値のあるものであるなら、余恩を仰ぎ、余光を取り、余命に讀書している私の三余は、はかりしれない程の価値のある三余ではないか。

〈展示品〉吉田松陰像（銅製 右手に本を持ち座す松陰（高さ29cm×幅18cm）

〈展示品〉徳富蘇峰著『吉田松陰』（初版）明治二十六年発行 民友社

徳富蘇峰著『吉田松陰』（改定版）明治四十一年発行 民友社

蘇峰は明治二十六年『吉田松陰』（初版）を発行するにあたり、勝海舟にその序文を依頼した。蘇峰はその緒言で「勝海舟翁、佐久間象山と旧交あり、象山は松陰の師、而して余亦海舟翁の門下に教を受く 故に翁の題言を請ふて、之を篇頭に掲ぐ 亦た因縁なくんばあらず」と述べている。

〈展示品〉勝海舟序文章稿

余曾見松陰先生於佐久間象山邸第 今閱此書不堪今昔之感
枉筆書一言卷首云 癸巳能冬 海舟

佐久間象山（一八一一〜一八六四 文化八〜元治一）信濃國

幕末期の思想家・兵学者。妻・順子（瑞枝）は勝海舟の妹。国定のち啓、幼名啓之助、通称修理。二十二歳のとき江戸に出て佐藤一斎に詩文を学ぶ。二年後帰藩したが、その四年後再び江戸に出て私塾を開く。天保十二年松代藩主真田幸貫が老中となり、海防掛になると命をうけて、海外事情を研究して「海防八策」を上書。また江川英龍に入門して砲術を修める。ガラスを製し、砲を鑄造、牛痘種の導入を図るなど多角的な活躍をした。吉田松陰の事件に連座して江戸小伝馬町の獄に入り、松代に塾居。元治元年幕命により上洛、一橋慶喜に謁し、公武合体論と開國論を説いた。京都三条木屋町で暗殺された。

〔展示品〕佐久間象山直筆のメモ書き

■横井小楠と佐久間象山（『近世日本国民史』100巻）

何人も横井小楠を思えば、佐久間象山を連想せざるを得ない。横井は文化六年（西暦一八〇九年）に九州肥後熊本に生れ、佐久間は文化八年（西暦一八一一年）に信州松代に生れ、即ち佐久間は横井に比し二歳の弟である。（中略）横井と佐久間と、其の出处進退に於て頗る相似たるものがある。然も兩人俱に西洋かぶれを為し、而して其の刺客の爲めに斃れたるは、佐久間は鳳盤を江州彦根に選すの説を立てたるが爲めということであり、横井は耶穌教を信じ、共和政治を主張したる爲めということである。

其の誤解を蒙りたる点に於ても亦た相似たるものがある。兎に角此の兩人は同時代に於て卓見の士であつたことは、天下公論の許す所である。勝海舟の亡友帖に於ても、横井・佐久間二人だけに、先生の名称を与えている。海舟が兩人を敬重したる所以、以て知るべしである。（中略）

均しく開國進取であるが、象山はナポレオンを理想の人とし、小楠はワシントンと理想の人としたるを以ても、彼等の互いに赴く所を知ることが出来る。開鎖の間に國論が沸騰し、国民其の向う所を未だ見出さざるに際し、此の二人は国民の先覚者として、其の進路を指点したるは、亦た以て当時の日本未だ必ずしも人物無きに非ざるを知ることが出来る。而して明治維新の大業も自ら彼等の力によつて、冥々の裡に推進せられたることを知るに足るものがあろう。

野村靖（一八四二〜一九〇九 天保十三〜明治四十二）長州

幕末・明治期の志士・政治家。名は和作、靖之助。号欲庵・香夢庵主。

安政四年吉田松陰門下に入り、のち尊攘運動に挺身。文久二年御殿山イギリス館焼討ちに加わる。禁門の変の後、御衝隊を率いて藩の内戦、幕長戦争に参加。維新後は岩倉具視らに随行して欧米にわたる。帰国後、駐仏公使、第二次伊藤内閣の内相、第二次松方内閣の通相に就任。明治三十三年に枢密顧問官。明治四十一年に発行された蘇峰著『吉田松陰』改定版の例言には、次のようにある。

■例言（『吉田松陰』改定版 明治四十一年発行）

旧書を改定するは、新たに起稿するの快活なるに若かず。況や此書の如き、修繕と云わんよりも、事実には、新築にも過ぎたる大修繕をや。

著者は前年来、屢々此の企を實行せんと欲して、遷延日一日を過ぎたり。偶々本年五月乃木大将の割切なる態度を受け、猛然として斯事に従う。八月三日緒論を起草し、九月五日結論を脱稿す。中間の小斧、大斧、旧著と比較せは、自ら分明ならん。若し乃木大将の一言微りせは、予は今日に於ても、其志を果し得たるや否を知らず。松陰門下の士、野村子爵は、著者の旧著『吉田松陰』に就て、最も厳密、精細なる批評を下し。且つ著者に対して、懇切、丁寧なる、数回の垂示を与えられたり。若し此書に於て、旧書に比して、更に松陰先生の真面目を発揮し得たる点ありとせば、其の一半は、野村子爵に負う所なることを、告白せすんはあらず。

〔展示書簡〕明治四十一年八月二十八日付

マシニイ（ジョゼツベ・マツツイーニ イタリア統一の三傑の一人）に関する二章御勇割之由猛奮之鋒可想。

○小生老母え先師より遣はされたる書は三月十一日なるべし。

○小生捕縛せられて萩に遠送せられしは三月下旬かと覚へ候。其日は忘れ申候。追懐録を御一閱可被下候。

○小生兄の揚屋日記なるものあり。未だ尊覧に入れず、之を御一覽候て御参考を為し被下候は、本懐之至に候。小生御供にて帰京之時は、来月十日前後なるべし。其節御手許へ差出すべく候。頓首

靖

八月廿八日 徳富学兄函丈

伊藤博文（一八四一〜一九〇九 天保十二〜明治四十二）周防

明治時代の指導的政治家。幼名は利助、のち俊輔（春輔、舜輔）とも称し

た。号は春畝、滄浪閣主人。長州藩軍制家・来原良蔵の紹介で吉田松陰の松下村塾に学ぶ。松陰はこの時の伊藤を「この児周旋の才あり」と認めた。木戸孝允に従い尊王攘夷運動に参加。一八六三年（文久三）井上馨（聞多）らと渡英。翌年、四国連合艦隊の下関砲撃の報を聞いて急遽帰国し、列国との講和を結ぶのに尽力。征韓論政変では大久保利通と木戸孝允の間を周旋した。明治十四年の政変で大隈重信らが失脚すると、憲法制定のためにヨーロッパへ渡り、初代枢密院議長として大日本帝国憲法制定に関わる。明治十七年に内閣制度が創設され、初代内閣総理大臣となる。のち枢密院議長、貴族院議長などを経て三回組閣、合わせて四度にわたって内閣総理大臣を務めた。明治四十二年、満州視察と露蔵相との会見のため出張中、ハルビン駅頭で暗殺された。

〈展示書簡〉伊藤利輔書簡 来原良蔵宛（軸物）

私儀昨年已来英学修業仕候儀念願有之候二付き巴二去ル御在府中にも御願申出度奉存候得共未夕道理之学問とても毫髪程も出来候目途も無之尚且（且つ）国家御多端中御厄害申出候事も奉恐入候段差控能「罷」居今日二至り候得とも只今之躰二而碌々能「罷」居候とても往々御奉公之目途も無之就而者何卒御屋敷外へ能「罷」出何レ之師家へなり共入込仕修業仕度奉存候に付「き」既二過ル八月頃桂様迄御願申出御政府御役人様方迄被仰入候得とも所金「詮」君候様御留守二而八御運び難相成との御事故推而御願も不申出今以打捨「テ」置候得とも是切リニ仕置候而ハ素志も難被仕逐千萬遺憾二奉打過候間何卒御多端中奉恐怖候得とも可相成儀二御座候得ば於御国之御詮儀「議」被仰付候而先年長崎「崎」表之地方但太郎其外修業として被相越来候先例も有之供奉に付偏二御詮儀「議」被仰付候へハ至願之程も逐度奉存候間閣下御慈悲ヲ御政府御役人中様方被仰入不及高大之望願御逐げさせ被仰下候様奉願上候然「る」上ハ益々精神相属し往々御奉公之目途も相立度奉存候當今萬事御多端之折柄斯ク御厄害申出候事も奉恐入候得とも偏二御願申出候段御差免被仰付候様奉願上候事 山下新兵衛組 利輔 花押

十二月十七日 来原様 奉呈執事閣下

明治四十五年三月二十七日付の古谷久綱の鑑定文意付
博文が安政五年（十八歳）に長州の恩師来原良蔵（侯爵木戸孝正の父）のもとへ送った伊藤の真筆ということである。「其篤学にして進取之氣象に富める公の人格を見るには好個の遺墨と存じ」と記されている。

山県有朋（一八三八〜一九二二）天保九〜大正十一）長門

明治・大正期の陸軍軍人・政治家。幼名は辰之助、通称は小輔、狂介、維新後に有朋と改名。松下村塾に学び、藩命で京都・江戸・鹿児島などを巡り各藩の尊攘派志士と交わった。一八六三年（文久三）奇兵隊の軍監となり、第二次征長の役に際し、幕軍と戦った。戊辰戦争では北陸鎮撫総督兼会津征討越後国総督の参謀として転戦。維新後はヨーロッパに派遣され、各国の軍事制度を視察。帰国後軍制改革を行い、徴兵制を取り入れた。明治六年陸軍卿となり、日本陸軍の基礎を作った。蘇峰は山県の用兵は正攻法、用心深すぎてしばしば戦機を逸したと書いている。西南戦争には征討参軍となる。その後大久保利通、木戸孝允の死、板垣退助、大隈重信の失脚によって伊藤博文とともに明治政府の最高指導者となった。第三代・第九代内閣総理大臣。

〈展示書簡〉明治四十一年十二月三十一日付

貴著吉田松陰を一読したるに先生の性行言論の大より一動一止の微に至るまで其真相を描写表出して毫も遺憾なし。本書は旧著を改訂し殆ど新に起稿せられしものにて其迅速にして精密なる寔に驚嘆の外なし。老生は先生の門下に在りしも先生の事蹟に於て此書の三分の一も見聞に及ばざりしなり。神州の正氣鍾りて此書に在れば実に天下の至幸と謂ふべし。豈独り門下生の欣喜措く能はざるのみならずや。閲読之余茲に一言の謝意を表し候。歳年崢嶸御繁忙相察候。盛壮なる御超歳を祈候。草々不宣
十二月卅一日 椿山莊主 朋 頓首
蘇峰老兄侍史

井上馨（一八三五〜一九一五）天保六〜大正四）周防吉敷郡

幕末・明治・大正期の政治家。幼名勇吉、のち聞多、号世外。長州藩士

井上光亨の次男。幼児より岩屋源蔵について蘭学を学び、尊王攘夷に共鳴。一八六二年（文久二）高杉晋作、久坂玄瑞らと外国公使館襲撃を企てた。翌年伊藤博文らとイギリスに留学。帰国後、四国連合艦隊の下関砲撃事件の調停に当たり藩論の統一につとめた。慶応一年木戸孝允らと薩長連合に奔走、薩藩を通じてイギリスから武器を購入し、幕府征長軍を破った。維新後は新政府参与となり、外交・財政の衝に当たった。第一次伊藤内閣の外相、第二次伊藤内閣の内相、一時首相をつとめた。第三次伊藤内閣では蔵相となった。明治三十四年元老となる。

〈展示書簡〉明治三十八年四月九日付

拝読 御依頼申上置候米國教育報告翻訳御成効之由万謝仕候。右は御申越し之如く出版は必要と奉存候間、何卒貴兄之出版に被成候而現場之費用は小生負担仕候覚に御坐候。且新聞上にも公告被成候而広く売却之方法も必要と奉存候間、売本家杯にも御相談被下度候。且桂總理えも御内談被成下候而文部又は地方官又は教育杯えも内務又は文部等よりも買入配本候は、多少公益とも可相成候間、御内談被成下候様奉煩候。左候は、幾分歎小生之負担も軽減可仕と奉存候。何れ近日讓拝晤可申候。勿々拝白
四月九日 馨

再 未だ咽喉も全快に不至候故、今兩三日当地滞在之積に御坐候。

■丸き伊藤、四角の山県、三角の井上（『我が交遊録』）

三人の容貌から見ても、山県の顔はまず四角で、一升楯に眼鼻をつけたようなものであり、伊藤の顔は丸くて福々しく、頭巾を被れば恰も立派なる生ける大黒様であり、それに引き換え井上の顔は強いていえば、まず三角ともいうのほかあるまい。別に頭が尖つていふというわけでもなく、頤が突き出ているというでもないが、彼の顔を見た気が、なんとなく鋭角的である。彼らの性格はその顔面が表す通りであり、伊藤は如何なる場合に於ても円満の立場を失わず、山県は城の如く要害堅固に構えており、井上は流星の如く、端倪すべからざるものがあった。而して彼ら三人の一生も、いずれもその顔面の表する如く、伊藤は丸く、山県は四角に、井上は三角に始終した。

③ ペリー来航

〈展示品〉安政二年 米国人来朝の図（絵巻二巻）（37cm×137cm）
ペリーが下田に来航した際、同行した絵師が描いた絵巻

■彼理来航の使命（『近世日本国民史』31巻）

彼理提督は、日本に好意を表せんが為めに来たのではなく、又た悪意を表せんが為めに来たのでもなく、只だ北米合衆国の利益一点張りにて来た訳だ。彼は当初より何等の禍心を、日本に向つて包蔵しなかつた。そは平和的に日本を開國せしむるは、北米合衆国に取りて、最も好都合であつたからだ。されど萬一日本が、之を拒否するに於ては、力づくにて、之を開かんとする覚悟であつた。そは当時の事情として、日本の開國は、米國に取りて必須の要件であつたからだ。

されば当時の日本人が、彼理提督の来航を見て、周章狼狽し、之を敵視し、之を仇讎視したるは、固より間違つたる見解でもあり、観察でもあつたが、後人が彼理を以て、日本の恩人視し、その意味にて記念碑を建立したるが如きも、亦た見当違ひだ。人各其の主とする所の為に殉う。彼理提督は只だ一心一向に、北米合衆国の利益の為に動き、且つ勵めた。其の結果が偶然日本に何物かを与えたかは、それは当人の関知する所ではなかつた。但だ、繰り返して云う、彼理提督は、未だ必ずしも日本に向つて、禍心を包蔵するものではなかつた。然も止むを得ざれば、兵力に訴えても、其の目的を達す可き決心はあつた。言い換うれば其の使命は平和的であつたが、徹頭徹尾、平和的ではなかつた。当初から喧嘩腰ではなかつたが、時と場合とによりては、然かすことをも辞せない覚悟であつた。

④ 幕末・維新に活躍した人々の書簡

新島襄（一八四三〜一八九〇）天保十四〜明治二十三 江戸

明治期のキリスト教の代表的教育者。安中藩士の子。一八六四年（元治二）密出国してアメリカに渡り、十年間滞在。アマースト大、アンドーパー神学校で学ぶ。明治八年京都に同志社英学校を開校。一八七六年（明治九）熊本洋学校に学んだ生徒（熊本バンド）約三十五人が入学。蘇峰もその一人であつた。一八八八年（明治二十二）十一月「同志社大 学設立の旨意」を全国の主要な雑誌・新聞に発表。井上馨・大隈重信・渋沢栄一・岩崎弥之助らから寄付金が集まつた。明治二十三年一月二十

三日大磯百足屋旅館で亡くなった。枕元で遺言の口述筆記をしたのが徳富蘇峰であった。

〈展示書簡〉明治二十一年十一月一日付く明治二十二年六月二十八日付の書簡八通の帖仕立

■新島 襄先生（『蘇翁感銘録』より）

自分の八十二年の永き生涯に、眞にわが師として念頭に離れざる人は唯一人、それは新島先生である。兼坂先生の如きも幼年時代の先生ではあるが、正直のところ一生の先生とは考えられない。その他、その時その時、その場合その場合に、孔子のいわゆる『三人行へば必ず我が師あり』という言葉通りに、師という字を使用して差支えない人は山ほどある。しかし一生を通じて眞にわが師と思ひ、今日に至るまで猶お思慕養禁する能わざるは新島先生である。

山本覚馬（一八二八〜一八九二 文政十一〜明治二十五）会津

幕末・明治前期の政治家。会津藩士。新島襄の妻八重の兄。日新館に学び文武兵学を修得し、後江戸へ出て勝海舟、西周らと交わる。帰藩後は、藩の兵制改革に従事し、会津藩蘭学所を設立した。禁門の変では、砲兵隊の指揮を取ったが、鳥羽・伏見の戦いで捕えられ、薩摩屋敷に幽閉され、このころ失明した。明治二年京都府顧問となり、明治十年まで府行政に参画、指導的役割を果たした。またキリスト教に共感、新島襄を助けて同志社を創立した。京都府会初代議長、京都商工会議所会頭、同志社臨時総長となった。

〈展示書簡〉明治二十三年三月五日付

拜啓仕候 爾来ハ絶テ御無音ニ打過御堪忍被下候 陳ハ新島襄就眠ノ際ハ一方ナラヌ御厚慮ヲ蒙リ奉深謝候 其后ハ彼ノ後任トシテ小生ヲ推撰セラレ候得共 何分御承知之身体ニ付萬端不都合勝テ併僅ノ日尔兎モ角モ承諾ハ仕置候得共 希ク八百時御遠慮ナク御口添之程奉懇望候 右ニ付小生カ旧知ノ榎本勝、井上、伊藤、松方、加藤弘之、西周、及ヒ河島醇ノ諸氏ニモ不取敢将来ノ為 依頼状ヲ本日差出置候間 左様御承知

被下候 先八右伺貴意度 艸々拜具 三月四日 山本覚馬 ㊦
徳富猪一郎様
湯浅次郎様

新島 八重子（一八四五〜一九三二 弘化二〜昭和七）会津

教育事業者。会津藩砲術指南役山本権八の娘。戊辰戦争会津鶴ヶ城籠城戦に、断髪男装で戦列に加わる。戦いの後、川崎尚之と離婚。失明した兄山本覚馬を助けるため京都に赴き、生活を共にしながら京都女紅場の女教員を務める。米国帰りのキリスト教徒新島襄と知り合い共鳴、私生地・財産を襄に提供、明治八年同志社を創立。兄の影響で新時代の教養を身につけた八重は、襄と結婚し、共に同志社の経営にあたる。病気がちな新島は明治二十三年急逝。のち同志社を家とし門下生を子とする。日清・日露戦争時には看護婦を志願、傷病兵の看護活動にも尽くした。

〈展示書簡〉明治四十四年十月十一日付

拜敬 此頃ハ俄ニ〇氣ニ相成申候 御皆々様御壮健ニテ〇〇ニ奉相候扱御尊父様九十 御めて度御よろこび申上候 御きねんとして実に御見事成御品私萬で御送り被下誠ニ難有戴度厚く御礼申し上げます。
十月十一日 徳富様 八重子

■会津御より見たる開城（三）（『近世日本国民史』73巻）

川崎尚之助の妻八重子は、山本覚馬の妹なり。圍城中に在り、髪を断ち、男子の軍装を為し、銃を執つて城壁又城樓より、屢々敵を斃せり。覚馬は西洋砲術を以て名あり。八重子は平生之を兄に学びて練修し、萬一の用意を為せしなり。或人婦人の戦に参するを諫めたるも、八重子聴かず。進撃ある毎に必ず刃（ひら）に隊後に加われり。此の日八重子は、城兵と共に城を出でんとするに当り、和歌を賦し、潸然として涕泣す。人皆同情の感に堪えざりきと云う。明日の夜はいづこの誰かながむらんなれし大城にのこす月影。後に八重子は、新島襄に再嫁し、九十歳に垂んとするの高齡もて、其の天年を終つた。而して本文の著者は、屢ば同人より会津電城の物語を聞いたことを、今尚お記憶している。

陸奥 宗光（一八四四〜一八九七 弘化一〜明治三〇）紀伊

明治時代の外交官。紀伊藩士伊達千広の六男。幼名牛麿、小二郎、のち

陽之助。十五歳のとき江戸遊学、その後京都に行き勤王運動に参加。一八六七年（慶応三）脱藩し、陸奥陽之助と称して、坂本龍馬の海援隊に加わった。西南戦争の際には林有造ら土佐派と反政府の拳兵を企んだとの理由で禁獄五年に処せられた。一八八二年（明治十五）赦免され、明治十六年から十九年まで欧米諸国に留学。帰国後、外務省に入る。伊藤博文内閣の外相となり、明治二十七年イギリスとの間で条約改正を実現したり、日清戦争の遂行に精励し、下関条約には全権として活躍した。

〈展示書簡〉明治（一）年二月五日付

舌代

少々御相談仕度事有之候間、甚恐入候得共明朝（十時比迄に）鳥渡鹿鳴館へ御入来被下間敷哉。

二月五日

宗光

徳富兄

■小説よりも奇なる生涯の陸奥宗光（『我が交遊録』より）

明治年間に於ける政治家中、最も珍らしき存在の一は、伯爵陸奥宗光であろう。如何に割引しても彼は政治家として、明治の史上に若干頁を刺すべき漢である。明治政府の大官として、即ち元老院幹事として、時の政府を顛覆し、または、時の要路の大官を暗殺するなどということの陰謀に與し、しかもその要路の大官なるものは、彼とは政友でもあり、政友以上の朋友でもあるというに至つては、随分思ひ切つたことを目論む漢と云わねばならぬ。もし目論むという語が過当であれば、如何に差引いても、與したる漢と云わねばならぬ。それが平気でそういうことを目論み、その事の破れて入獄するや、また平気で獄中より出で来り、新規蒔直して、その顛覆せんとしたる政府の人となり、遂に己れもまた最も重要な外務大臣となつて、条約改正やら、日清戦争やらに就いて、それぞれ功績を立て、然も漸く人生五十を過ぐる四歳にして逝きたるは、実に異常の生涯と云わねばならぬ。世人はテスレリーの生涯を見て、これを伝奇的というが、陸奥の生涯はそれに比すれば、より伝奇的である。如何なる奇想天外より出る小説家でも、彼の生涯ほどの波瀾多き、変化多き生涯を、空中に描き出すことは出来まい。

田中光頭（一八四三—一九三九 天保十四—昭和十四）土佐

明治時代の宮中政治家。幼名頭助、号青山。幕末、武市瑞山に師事し、

土佐勤王党に属す。一八七四年（明治七）会計検査官、西南の役では征討軍会計部長をつとめる。役後陸軍に入ったが武職に就かず、会計検査院長などを歴任し、少将で退役する。一八八九年（明治二十二）警視總監に任ぜられた。学習院長、宮内次官をへて、一八九八年（明治三十一年）宮内相に就任。以来十一年間宮中に絶大な勢力を築いたが、末期には本願寺武庫別荘買上げをめぐる収賄を疑われて、明治四十二年辞任。以後隠退した。明治四十年伯爵。

〈展示書簡〉大正十五年八月二十四日付

芳墨拜見。秋暑未去候処益御壮健、南北御探勝敬服仕候。陳ば草津御遊歴西山洞にまで被枉至趾候趣、然に一榻之設さへも無之、慙愧に不堪候。御批評は承り度と存候に付、貴新紙之出来を一日三秋相待居申候。来月廿四日故南洲翁五十回忌辰に付、御追福之拳御企たる、誠に満厚之御美奉感服仕候。小生は維新以前より親交の事に有之、明治四年米欧行之節、三条公邸に而、送別之宴に列し候際、同席仕候ひしが最後之別れに而、十年城山に而は首に對し無限之感に被打候事、今以難忘候。書余在後信。勿略不具

大正十五年八月廿四日 光頭

蘇峰先生研北

■田中青山伯 自ら信ずる所を行う人（『蘇翁感銘録』）

明治四十三年一月、國民新聞で維新志士遺墨展覧会を上野に催したことがあるが、これには田中伯も非常なる賛意を表された。而して各皇族方は勿論、後の大正天皇、当時の皇太子殿下も鶴駕を任せ給うて、田中伯もそれに陪従し、辱くも予が御案内且つ御説明を申上ぐるの光栄を辱くした。この展覧会が維新志士に関する世間の注意を喚び起したる一大原因といわざるまでも、一大刺戟力であつたことは申すでもなく、この会の前後で維新志士の遺墨の市価は十倍を上する程であつた。（中略）伯と親密となつたのは、予の所謂皇室中心主義と伯の尊皇論とが、期せずして一致したためであることはいうまでもない。殊に予が修史に際して、わが国史の正常なる見解を水戸に求めた点が、また伯とその意見を一にした。更めていうが、第一、皇室中心主義に於て、第二、維新回天の大業に関する見解に於て、第三、水戸の歴史観を以て正当視する点に於て、予と田中伯とはその意見を一にした。そのために、やがては切つても切れぬ仲となつた。

香川敬三（一八三九〜一九一五 天保十〜大正四）水戸

幕末・維新期の志士。水戸藩士蓮田孝定の子。変名で鯉沼伊織、小林彦次郎、藤田東湖に学ぶ。尊王攘夷運動に加わり、一八六三年（文久三）藩主徳川慶篤に従い上洛。岩倉具視のもとで倒幕の密議に参加。明治一年戊辰戦争に際して軍監として関東に転戦、流山で近藤勇を捕らえるのに働く。一八七二年欧米を視察、帰国後、宮内少輔など歴任した。枢密顧問官。伯爵。香川敬三については蘇峰著『三代人物史』の「最後の悲劇」の文章中に記述がある。

〈展示書簡〉明治四十二年十二月七日付

拝啓益御安祥奉敬賀候 維新志士之遺墨十五点過日阪本君二相渡し申候処
右二対シ御懇篤之御書面被下奉拝謝候 不取敢御請迄如此御座候 敬具
十二月七日 敬三
徳富様侍史

■最後の中岡（『三代人物史』より）

中岡は痛みを辛抱し、裏の物干に出て、近江屋の家を呼んだが答なく、更に屋根伝いに井筒屋善八の屋根に上り、救いを求めし誰も来る者なく、纏て峰吉は軍鶏の竹皮包を下げて帰宅し、隣家の屋根の上に中岡のあるを見て、之を呼び一同協力して、中岡を隣家の屋根より八畳の座敷に昇ぎ込んだ。中岡は致命傷を負いつつも、精神は尚確かであった。田中頭助（田中光頭）、吉井幸輔等の諸士は急を聞いて馳せ付け、中岡に向つて慰籍の言葉を以て励ました。然も彼は、従容として枕頭に待てる鯉沼伊織（香川敬三）を顧み、我が為めに岩倉卿に告げられよ、王政復古の事に、卿の力に依ると、斯くて中岡は十七日晚景、龍馬の跡を追い逝いた。享年三十。

川上操六（一八四八〜一八九九 嘉永一年〜明治三十二）薩摩

明治時代の陸軍軍人。藩校造士館に学ぶ。戊辰戦争には藩兵分隊長として上京。佐賀の乱、西南戦争にも参加した。一八八四年（明治十七）大山巖に随行して欧州兵制を視察。一八八六年（明治十九）にドイツにわたり兵制を研究し、日本陸軍の兵制をフランス式からドイツ式に転換する事業に加わった。日清戦争には大本営参謀として従軍した。一八九八年（明治三一）陸軍大将となり参謀総長に任ぜられた。蘇峰は石黒忠憲

からの依頼で『陸軍大将川上操六』を昭和十七年にまとめている。

〈展示書簡〉明治（二十七）年七月二十九日付

玉章拝誦。今日之善戦他日之大勝利吉兆なるべし。唯々御堪忍第一と奉存候。

楮別封品物は有合にまかせ呈上仕候間、御笑留被成下候得ば至而幸甚候。先は貴酬のみ。勿々百拜 七月廿九日 操六拜

徳富尊兄玉坐下

■思いやりの深かった將軍（『蘇翁感銘録』より）

將軍は学者ではなかった。また学問の好き者でもなかった。將軍は桂の如く自ら外国語をもやらなかった。併し人を用いることの巧妙なることに至っては殆ど無類といつてもよかつたろう。この点桂もなかなかさるものであったが、到底將軍程の鮮やかさはなかった。当時陸軍のブレンは殆ど参謀本部に集まり、たゞ集まるばかりでなく、各々適材が適所に働いていた。外国の諜報などに至っては外務省などは到底及ばなかった。而して將軍が人を使うの妙に至つては、上は大員、大将より、下は小使、給仕に至るまで、何れも皆欣然としてその用を弁せざるものはなかったのでもわかる。

また將軍は実に思い遣りが深かった。勘がよかつた。頭が閃いていた。（中略）世の中では大きな事に氣のつくものは小さい事には氣がつかず、小さい事に氣がつくものは大きな事に氣がつかない。ところが將軍は細大漏らさず、殆んど萬遍なく氣がついた。予は永き期間に於てあらゆる人と接触したが、未だ嘗て將軍程よく氣のつく人を見たことがない。而もそれがわざとらしくなく、殆ど自然に出て來つた。

渋沢栄一（一八四〇〜一九三二 天保十一〜昭和六）武蔵国横沢郡

明治・大正期の実業家。生家は農耕・養蚕を営む豪農。尊王攘夷論に共鳴し志士と交わつた。一橋家家臣の平岡四郎の推薦により一橋慶喜に仕えることになる。一八六六年（慶応二）一橋慶喜が將軍を継ぐとともに幕臣となる。一八六七年（慶応三）パリ万国博覧会に出席する徳川昭武に随行して渡欧し、各国の近代産業設備や経済制度を見聞した。この時に得た産業・商業・金融に関する知識が、後年の活躍に大いに役立った。第一国立銀行を設立。展示書簡からもわかるように、渋沢は同志社大学設立のために協力している。

〈展示書簡〉明治（一）年五月二十九日付

拝読仕候 新島君より貴台へ御申越の義有之候二付 小生陸羽旅行前御面話を被為口候趣来示拝承仕候 実は同氏より数回書状も有之候旁 小生も御答申上度と相考候折柄二付 幸拜光御打合も仕度候間 今日二ても明日二ても午後一二時頃二兜町弊銀行へ御過訪被下間敷哉 尚委曲は拜晤二譲り不取敢奉答如此御坐候 不宣

五月念九 洪澤栄一

徳富猪一郎様

アーネスト・サトー（一八四三〜一九二九）

イギリスの外交官。日本名は佐藤愛之助。通訳見習いとして一八六二年（文久二）来日。通弁官・書記官として公使オールコック、ハリー・パークスを助けて活躍。とくに薩長など反幕派の志士と交わり、反幕派を支持するイギリス対日政策の展開に貢献。一八八三年（明治十六）イギリスに帰国後、シヤムなどに勤務し、一八九五〜一九〇〇年（明治二十八〜三十三年）に公使として再び来日。一九〇〇〜一九〇六年、中国公使として義和団事件などを処理。日本研究者としても著名である。蘇峰はアーネスト・サトー著の『日本に於ける或る外交官』（第五十一巻）を『近世日本国民史』において、幕末・明治維新の「対外関係」を叙述をするのに使用している。

〈展示書簡〉明治三十七年十一月十八日付 中国北京より

（和訳）『The Jesuit Mission Press in Japan』の異本を持っているかとのお尋ねですが、残念ながら持っておりません。しかしどうしてもその本をお調べになりたいのでしたら、築地にあるアジア協会の図書館にあると思います。私の友人チエンバレン教授がもっていると思われれます。（書簡中に見られる『The Jesuit Mission Press in Japan 1591-1610』は一八八八年に出版されたアーネスト・サトーの著書。）

⑤ 江戸城無血開城の立役者たち

西郷隆盛（一八二七〜一八七七） 文政十〜明治十） 薩摩

幕末維新期の政治家。幼名小吉、やや長じて吉之介、通称吉兵衛・吉之助。維新後隆盛、雅号を南洲。大久保利通・木戸孝允と並び維新の三傑と称される。藩校造士館に学ぶ。江戸で藩主島津斉彬の知遇を受けた。二度の島流しに遭った後、薩摩藩軍賦役に就任し、大久保利通らと結んで禁門の変・第一次長州戦争では幕府側の指導者として活躍。藩論を公武合体から尊王倒幕へ転換させ、慶応二年長州の木戸孝允との間に薩長連合盟約を結び、倒幕の準備をすすめた。一八六八年王政復古のクーデターに成功し、戊辰戦争を巧みに主導した。江戸城無血開城に成功した後、薩摩に帰藩。一八七〇年（明治三）政府の招請により上京。参議として廃藩置県に協力したが、一八七三年征韓論を主張し、大久保利通らと対立して下野、帰郷する。明治十年西南戦争を起こして敗れ、自刃した。

〈展示品〉外套毛皮裏付黒色 鹿児島博物館に出品された時の証明書付

証明書には「西郷南洲翁の着用されしものにして、明治十年西南戦争中、南洲翁より逸見十郎太氏に給わりしもの」とある。この外套を鹿児島に出かけた茂木育造が手に入れ、土産として蘇峰に贈った。（昭和二十九年八月十一日付蘇峰宛茂木書簡による）徳富蘇峰記念館の創立者塩崎彦市が二宮で蘇峰を囲む親睦会を催し、その返礼として蘇峰からこの外套を恵贈された。

*逸見十郎太は西郷軍の中でも突出した天才で弱冠二十九歳の最年少隊長。西南戦争で流弾で没した。

〈展示品〉蘇峰漢詩 七言絶句 昭和十五年（軸物）

堂々錦旆庄閔東 堂々たる錦旆閔東を庄す

百万死生談笑中 百万の死生談笑の中

群小不知天下計 群小は知らず天下の計

千秋相對両英雄 千秋相對す両英雄

昭和庚辰十月二十四日岳麓双宜荘に於て、時に冷雨蕭条庭前紅葉点滴にして窓を撲つ 老蘇七十八

■「官軍東下篇 刊行に就て」（『近世日本国民史』68巻）

明治史劈頭に於て、幾多の面白き活劇がある。其内でも自から明暗二筋の筋道がある。例えば薩長芸が、討幕の密勅を奉請降下の如きは、若し之を大なる陰謀と云う

が穏かでないとするれば、勢くとも大なる地下工作である。これに反して江戸城授受の一齣の如きは、公明正大、稠人環視の中に行われたる、極めて朗かなる活劇である。此の如き活劇を見れば、恰も長き長き真暗なる隧道を過ぎて、天高く地広く、滴降快活なる世界に出て来りたるが如く、寔に愉快の極みである。世間では江戸城受取り渡しは、西郷・勝兩人談笑の間に、恰も犬の仔や猫の子を授受する如く、容易に出来たのを見て、当然のこの様に思うが、三百年來龍蟠虎踞して天下に号令し、日本全国の凡有る権力の七八迄は其の中心であつた其の江戸の、其の又た中心である江戸城を受取り渡しする事は、決して容易のことでは無かつた。

〈展示品〉三舟の書（軸物）

① 青山烟霞静海波 鉄舟高歩書

山岡鉄舟

② 雨晴江水碧烟佳遠山晴 海舟

勝海舟

③ (嵩)山不揺石映(日)(自)傾茶 泥舟居士書

高橋泥舟

山岡鉄舟（一八三六〜一八八八 天保七〜明治二十一）江戸

幕末・明治前期の剣客・政治家。名は高歩。字は猛虎、通称鉄太郎。鉄舟は号。妻英子は高橋泥舟の妹。幼年よりとくに剣術を好み、江戸の千葉周作の門に入り、のちに無刀流を開き、春風館という道場を設立して多数の門人を集めた。やがて幕府講武所剣術心得となる。一八六二年（文久二）浪士取締役となり、高橋泥舟らと共に江戸の治安維持にあたる。明治一年官軍が江戸に迫ると、勝海舟の使者として駿府に赴き、西郷・勝会談を周旋して江戸城明渡しへの道を開いた。

勝海舟（一八二三〜一八九九 文政六〜明治三十二）江戸

幕末・明治期の政治家。初め義邦のち麟太郎。幕末に安房守、維新後は安芳と改名。海舟は号。少年時代に島田見山に剣道を学び、さらに永井青崖について蘭学を修業し、一八五〇年（嘉永三）私塾を開いて蘭学と兵学を教えた。海軍伝習生として長崎に赴き、多くの知識を得て江戸に

戻る。万延一年日米修好通商条約批准のため、外国奉行新見正興らが渡米する際、咸臨丸艦長として乗組み、日本人最初の太平洋横断航海に成功。帰国後軍艦奉行並となる。徳川家茂の旨をうけ、神戸海軍操練所を設置し、広く幕臣以外に薩・長・土諸藩からも人材を集め、育成につとめた。一八六四年海軍奉行となつたが、操練所における勝の開放的方针が疑われ罷免・蟄居させられた。一八六六年（慶応二）軍艦奉行に復活。第二次長州征討では幕府の全権使節として平和的交渉に努力した。鳥羽・伏見の戦では、將軍徳川慶喜の意を受け官軍の参謀西郷隆盛と会いし、江戸城の平和的明渡しに成功した。維新後は新政府の海軍大輔、ついで参議兼海軍卿・伯爵、枢密顧問官となつた。

高橋泥舟（一八三五〜一九〇三 天保六〜明治三十六）江戸

幕末・維新期の幕臣。名は政晃、幼名謙三郎、字は寛猛、通称精一。高橋家を継ぎ、二十五歳で講武所師範となり、伊勢守に任じた。文久三年新徴組を率いて上洛したこともあつたが、時勢を察し、鳥羽・伏見の戦後には將軍徳川慶喜に恭順を説き、終始慶喜を警護した。

⑥ 橋本雅邦の四季山水

橋本雅邦（一八三五〜一九〇八 天保六〜明治四十二）江戸

明治時代の日本画家。幼名千太郎のち長卿。狩野勝川の門に学ぶ。維新前後から窮乏の生活が続いたが、明治十二年、第一回絵画共進会でようやく認められ、明治十七年の共進会でフェノロサの知遇を得、以後岡倉天心らと日本画革新の運動を推進した。明治三十一年日本美術院創立に参画。天心とともに横山大観・菱田春草・下村観山・川合玉堂ら多くの逸材を育てた。代表作「白雲紅樹図」「龍虎図屏風」

〈展示品〉四季山水（軸物 四幅）

〈展示品〉橋本秀邦の添状（巻物）

先考雅邦翁筆、紙本墨画四季山水四幅対、正三拝見仕候。先考の作品に對して賛辞を呈するは如何と存候得共、瀟洒清爽の氣に満ち、何となく

先考の温容に接するの感有之候。何卒永く御愛蔵成下度希望乃至に堪へす候。大正十二年七月、橋本秀邦

〈展示品〉徳富蘇峰の譲り状(巻物)

橋本翁雅邦八明治ノ巨匠ニシテ皇国近世我畫家ノ泰斗也 其畫古今東西ノ神髓ヲ折衷シテ自ラ一家ヲ作ス 予往年東台繪畫展覽會ニ赴「ケ」リ 偶々親友川上參謀總長在焉 乃チ相與ニ橋本雅邦 岡倉天心諸君ト總長ニ誘ハレテ午餐ヲ階ニス 興趣如湧 總長從客予ニ誘テ曰ク 此ニ北京矢野公使「矢野文雄」ヨリ乾隆佳帑ヲ獲タリ 希クハ橋本翁ノ揮洒ヲ乞フテ 之ヲ君ニ呈セント 翁首肯ス 幾モナク總長歸幽 事遂ニ熄ム 予乃翁ヲ訪フテ曰ク 總長ノ言 耳尚熟ス 敢テ翁ヲ煩ストコロアラシ 但タ佳紙ナキヲ 憾ムル耳ト 翁欣然トシテ曰ク 吾ニ越前新製ノ雅邦紙アリ 之ヲ以テ君ノ望ニ應エント 此ニ於テ予曰ク 畫題ハ四季山水 而シテ惜墨如黃金 愛筆如白金ヲ是望ムト 翁復欣然快諾ス 予翁ノ作ヲ得ルヤ珎重措カス 日夕青山艸堂ノ楼上ニ遍「扁」額トシテ相欣賞ス 偶々児万熊曰ク 遍「扁」額ハ名畫ヲ永久ニ護持スル所以ニアラズ 請フ之ヲ條幅トセント 仍リテ其言ノ如ク改装シ 之ヲ成篋堂ニ藏スル有年於茲去年春夏ノ交 予罹疾 荏冉「舊」不癒 塩崎君彦市勞ヲ忘レ 苦ヲ忘レ費ヲ忘レ 遂ニ吾ヲ忘レ 周旋奔走 漸ク小康ヲ得ルニ至レリ 予一物ノ以テ君ニ報ユルナシ 是ヲ以テ家妻ト胥議シ 不腆ノ什ヲ拳ケテ之ヲ贈ル 餘情紙外ニ在リ 君看取セヨト云爾 昭和癸未九月吉 老蘇八十一

⑦ 司馬江漢の世界地図・貝原益軒の廻文詩

司馬江漢(一七三八または四七〇一八一八 元文三〜文政一)江戸江戸後期の洋風画家・蘭学者。通称勝三郎・吉次郎のち弥太夫。唐風に改めて、姓を司馬、名を峻。別号 無言道人、春波楼、西洋道人。狩野古信に学び、のち末紫石に学ぶ。同じ頃鈴木春信に師事したともいわれる。末紫石を通じて平賀源内を知る。明和・安永年間(一七六四〜一七八〇)は沈南蘋風の花鳥画と鈴木春重・蘭亭春信と署名する春信風の浮

世絵を描いたが、天明年間(一七八一〜一七八八)には日本最初の腐食銅版画を創製する。天明末期・寛政期はろう画(油絵)の制作に熱中し、より完全な洋風表現様式獲得に努力した。画業の他、長崎遊歴(一七八八〜八九)や平賀源内・大槻玄沢らの影響を受けて、西洋理学の研究にも関心を持ち天文地理学の著書も多い。

*沈南蘋 江戸中期に來日した中国の花鳥風画家。彼の來日は日本画壇に大きな影響を与え、新しく写生的な花鳥画の勃興をみた。

〈展示品〉世界地図 司馬江漢画(軸物)

貝原益軒(一六三〇〜一七一四 寛永七〜正徳四)

江戸前・中期の儒学者。福岡藩祐筆貝原寬斎の四男。名は篤信。別号損軒・柔斎。父や兄・在齋に医学・漢学を学ぶ。一六四八年藩に出仕したが、藩主黒田忠之の叱責をうけて浪人。一六五五年文治主義の藩主黒田光之に出仕、藩医となる。藩命により京都に遊学、本草学者らと交わる。帰藩し、藩主・世子・重臣らに書を講じた。また領内を巡検して『筑前国統風土記』を編む。初め陽明学を好み、のち朱子学に帰すが、最晩年には朱子学を批判するに至った。『大和本草』を著し、医学では『養生訓』が代表作である。又子女の教育法を説いた『和俗童子訓』は近世教育に大きな影響を及ぼした。そのほか著書は極めて多い。

〈展示品〉廻文詩 貝原益軒書(軸物)

■文教普及の大立物『近世日本国民史』21巻

貝原益軒が、徳川時代、教化の普及に、如何なる程度の勢力あつたか、今ま猝かに測定し難い。然も其の感化は、膏雨の物を潤す如く、極めて静かに、柔かに、当り障りなく、漸次に及んだことは間違いない。益軒は別に何等の新たな思想を注入したことはない。何れかと云えば、月並の思想を、月並に説きたるに過ぎなかつた。言を換えていえば、朱子学流儀の儒教思想を、平らたく、穏かに、萬人に受け容れらるゝ様に、説教したるに止まつた。されば彼は別に何等の波瀾を、日本の思想界にも、又た生活界にも、捲き起すが如きことは無かつた。

之に反して狹生徂徠は、幕府時代に於ける、学問界に、若し新たな思想と云う能わずんば、少くとも学問に対する新態度を、唱提し來つた。世人は、徂徠が李干麟・王元美の、古文修辭の流を酌み來りて、学界に洪水を瀦らしたと云うが、徂徠の本色

は、必ずしも修辭には限らなかつた。彼は當時の學問の本流たる、朱子學に對して、反旗を翻えした。而して其の當時に於ける勢力は、申す迄もなく、徳川幕府の時代を終る迄、彼の感化は、順縁にも、逆縁にも、波及した。

8 幕末・明治初期の新聞

新聞名	創刊年	新聞名	創刊年
バタビア新聞 (文久新聞)	文久2年	海外新聞別集	文久2年
遠近新聞	慶応4年	日日新聞	慶応4年
江湖新聞	慶応4年	中外新聞	慶応4年
横浜新報もしほ草	慶応4年	そよぶく風	慶応4年
中外新報	慶応4年	公私雜報	慶応4年

9 平賀源内の書状・福沢諭吉の『西洋事情』『世界国盡』

平賀源内 (一七二八—一七七九 享保十三—安永八) 讃岐国志度浦

江戸中・後期の本草学者・戯作者。高松藩足輕白石良房の三男。家督後先祖の平賀姓となる。一七五二年藩命により長崎に留学、医学・蘭学を学ぶ。一七五四年家督を妹婿に譲つて江戸に出て、田村藍水につき昌平塾にも籍を置いた。一七六〇年ごろには本草学者として名声を得、葉坊主格四人扶持を給されたが、封建的束縛の故か、高松藩を辞して浪人となり一時は田沼意次に仕えた。火洗布・寒暖計・羅紗の製作。鉱山開発、油絵などあらゆる分野に才能を発揮。なかでもエレクトル(摩擦起電器)は最も人を驚かした。文学面でも滑稽本などで当時の社会や思想に対する鋭い批判を行った。しかしありあまる才能を持ちながら世に迎えられぬ生活の苛立ちから、一七七八年二人を殺傷、翌年牢獄で病死した。

〈展示品〉平賀源内書状(巻物)

■平賀源内(『近世日本国民史』23巻)

平賀源内は、徒らに滑稽世を弄ぶ閑人ではなかつた。彼の本領は、所謂當時の山師であつた。山師とは単に金山とか、銀山とか、銅山とか、鐵山とかを握るばかり

でなく、凡有る利用厚生之道に、新奇なる才覚・工面を為す者を意味する所のその一人であつた。(中略)平賀源内が、奇才であつたことは、其の友人杉田玄白の所記によりて察す可しだ。彼は実に八方無礙の良き頭腦の持主であつた。眼快手利とは、彼のことであろう。彼の死は、杉田玄白の撰した墓誌銘には、安永己亥(八年)狂病人を殺す、獄に下る。十二月十八日疾んで獄中に没す。時に年五十一とある。それを遡れば、享保十四年己酉の生れた。或は又た其の死を四十八歳とする説もあれば、それに従へば、享保十七年壬子となる。何れにしても、杉田玄白よりも年長で、前野長澤よりも年少で、両者の中間にあつた。

福沢諭吉(一八三五—一九〇一 天保五—明治三十四) 豊前

明治時代の民間啓蒙思想家。中津藩士の五男。門閥制度に違和感を持つて育つ。十九歳で長崎遊学。のち大坂で緒方洪庵に蘭学を学ぶ。一八五八年(安政五)藩命で江戸に出府、翌年英学に転じた。この間三度にわたり、幕府遣外使節に随行して欧米を視察。欧米近代文明に関する当代最高の新知識人となる。明治一年慶應義塾を創設した。

〈展示品〉福沢諭吉著『西洋事情』『世界国盡』

・『西洋事情』は初編三冊、外編三冊、二編四冊より成り、それぞれ慶応二年、同三年、明治三年の刊記がある。内容は欧米諸国の文化・社会・政治・軍制・経済・倫理など広範囲に及ぶ。当時における欧米の入門書として普及し、諭吉自身も「余が著訳中、最も広く世に行われ最も能く人の目に触れた書であつたと語っている。」

・『世界国盡』は明治二年に刊行された世界地理の入門書である。一の巻はアジア、二の巻はアフリカ、三の巻はヨーロッパ、四の巻は北アメリカ、五の巻は南アメリカと太平洋諸島およびオーストラリア、そして六の巻は附録(地理学の総論)といった構成である。全巻にわたつて、ほとんど全てのページに図が添えられていて、地理案内の図解のように構成されている。七五調で面白く書き綴り、習字の手本とすると同時に、その文句を誦誦して自然に万国の地理風俗を覚えさせる趣向で著わされている。

(慶應義塾図書館デジタルギャラリー「福沢著作コレクション解説」参照)

■英語の普及(『近世日本国民史』61巻)

若し英語を通じて、日本の文化に大なる感化を及ぼしたる個人を求めば、少くとも明治の初期を堺として、其の以前に於ては、内外人を一括して、未だ福澤諭吉其人

に如くものはあるまい。彼は英語学者でもなく、又た厳密なる意味に於ける専門的知識の泉源たる学者でも無かった。然も一大常識家としての彼、一大泰西文化の宣傳者としての彼、更に一大世間的論評家としての彼は、其の餘りに多からざる自家の英語の知識をば、十二分に活用し、それを縦横無礙に適用して、当時の社会に、一大警策を与へた。切言すれば総ての学者を一方に、福澤一人を他方に掛けて、其の軽重を秤量しても、福澤一人の方が、寧ろ重くはあるまい乎と思はるゝ程であつた。但だそれは明治の初期に於てであつて、徳川幕府の末期には、それ程ではなかつた。然も当時一安政の末から慶應の末まで一に於てさえも、彼を如何なる他の一人と比較しても、恐らくは彼を凌駕するものは無かつたであらう。

⑩ 蘇峰の身近かにいた思想家

横井小楠（一八〇九〜一八六九 文化六〜明治二）肥後

幕末・維新期の政治家。本名時存、通称平四郎。藩校時習館に学ぶ。一八三九年（天保十）藩命で江戸に遊学、藤田東湖らと交わる。翌年帰国し家塾を開き、熊本藩実学党を結成。その綱領「時務策」を草し藩政改革に乗り出すが失敗。「学政一致」「経世安民」の学問としての実学となえ、諸国を遊歴し、越前や尾張に遊び、吉田松陰・橋本左内らと交わる。一八五五年（安政二）肥後藩内で実学党上土層の人々と分裂、下士豪農層の代表者として活躍。一八五八年越前藩主松平慶永に招かれて政治顧問となる。一八六〇年（万延一）『国是三論』を著し、対外危機に対処するために開国通商・殖産興業による富国強兵を主張、左内亡き後の藩政改革を指導したが、一八六三年越前藩の政変で失脚して熊本に帰る。その後の閑居中も坂本竜馬ら志士の訪問が多かつた。一八六八年（明治一）参与となり新政府に出仕。翌年一月耶蘇教徒・共和的思想の持ち主として保守派に京都寺町で暗殺された。

〈展示品〉横井小楠書（軸物）

人心惟危 道心惟微 惟精惟一 允執厥中
（大意）

現今人心は安定を欠き、道徳心も薄れているが、人間として大切なことは中庸を守るというそのことだけである。

■横井小楠と実学党（『近世日本国民史』94巻）
横井小楠の発生は、宛も石を池中に投じたるが如く、其の波乱は全面に及んだ。小楠は所謂の文王を待たずして興りたるもの、時習館の居寮生中より此の如き時習館に対する反逆児の発生したるは、意外と云えば意外であるが、意外ならずと云えば、また意外ならずである。

徳富一敬（一八二二〜一九一四 文政五〜大正三）肥後

幕末・明治期の漢学者・教育者。徳富蘇峰・蘆花の父。通称太多助、太多七。号淇水。惣庄屋兼代官徳富美信の長男。十二・三歳で四書五經の素読を終え、藩校時習館に学んだ。一八四五年横井小楠の門に入った。一八五一年帰郷し、小楠の主義を掲げて郷党の青年を指導、活躍した。明治十三年同志の山田武甫や宮川房之、津田山三郎らと協議し熊本の上林町に私立中学共立学舎を設立し、その漢学部の教授となり、二・三年に亘り精勤した。この共立学舎は同心学舎に対立するものとして実学党の教育機関であつた。

〈展示品〉徳富一敬書（軸物）

■予が父淇水翁（『蘇翁感銘録』）
予は常に父の事を思い、父に及ばざるでも、せめて父の子たるを辱しめまいと願つている。父なかりせば、とても予は予の今日を見ることは出来なかつたことを思い、今更思慕の念に堪えない。父恩を感じない人間は何人もあるまいが、予に於ては殊にそれが深い。このことも予にとつては最上の幸である。（中略）
なお予が父に感謝したいことは、初めからよく予を理解し、一生予を理解して、予にとつては無二の父であると同時に、無二の師友であつたことだ。（中略）予の一生の努力も、精進も、反省も、みな悉く父を対象として出て来りたるものであると言つても、決して言い過ぎではあるまいと信ずる。

兼坂止水（一八三三〜一九〇一 天保四〜明治三十四）肥後

熊本藩校時習館に学び、木下韃村の塾で経学を学ぶ。井上毅、竹添進一郎も同じ木下門下生で親しかつた。明治元年より時習館で教える。明治四年帰農の願書を出し家禄を帰し、百梅園と名づけた地に家塾を開いた。蘇峰もこの塾で学び「兼坂塾では平民主義と進歩主義を教わり感謝

している」と述べている。この頃でできた熊本洋学校でも隔日出張して漢籍を教えた。兼坂塾は明治九年に廃校し、止水は次に製茶業を起こす。そして伝習生には京都宇治で茶業の技術を習わせ「学問と実業の一致」を実地にしめた。彼はまた詩人でもあり、世俗の煩わしさを避け、仙人に憧れ、仙術を学ぼうとした。詩友書友らと文墨に親しみ、悠々閑雅な日を送った。明治三十四年六十九歳で亡くなった。

〈展示書簡〉明治（一）年四月十九日付

拝呈致候 御下着の事ハ承知仕候 直ニ參上御尋申候旨の處折悪敷風邪ニテ打臥分二も出来不申御断申候 下拙も昨冬より一月迄出京致候 久々ニ出京ゆへ 友人東西尋問繁忙ニテ終ニ貴宅迄到り兼甚以失敬仕候 然シ御大人様ハ一度御尋久々御歡談申候其後も折々詩の御贈答仕候 此節美器アミカハン且詩箋御惠贈の趣千万忝く御厚情の至 深く奉謝候 下拙今一度出京の心組二居申候 其節必御尋可申候 先書中を以テ御礼 申上候 早々

四月十九日

兼坂諄次郎

徳富猪一郎様

■兼坂先生（『蘇翁感銘録』より）

予が一生の生活様式は九歳から十一、十二歳までの間の数年間における先生の村塾生活によって、殆ど一切の型が出来たのではないかと思う。そのうちでも予の一生を貫く平民的趣味なるものは全く先生の村塾にて養われたるものではないかと思う。

藤田東湖（一八〇六〜一八五五 文化三〜安政二）常陸国水戸

幕末期の政治家・思想家。藤田幽谷の次男。名は彪。幼名武次郎、通称虎之助のち誠之進。蘇峰の近世日本国民史の人物概覧には「若冠の時讀書を好まず、専ら武術を習いしが、一朝感ずる所ありて刻苦書を読み学業大に進む。人となり豪邁にして慷慨の氣象に富む」とある。一八一九年（文政二）頃より江戸へ出て文武を学ぶ。一八二七年（文政十）家督を継いで二百石。文政十二年藩主斉脩に嗣子がなかったため、藩主の弟徳川斉昭擁立に奔走し実現。斉昭のもと郡奉行、江戸通事、御用人など

を歴任。藩政改革派の中心となつて藩政の実権を掌握。保守派との対立が激化し、斉昭は幕命により謹慎、東湖も塾居を命じられる。幽居の間に後期水戸学の代表的著作『回天詩史』『正気歌』などを著した。一八四九年斉昭とともに藩政に復帰。一八五三年ペリーが来航すると、斉昭は幕政に登用され、東湖も海岸防禦掛、側用人となり活躍。熱烈な尊王攘夷論により名声は全国に広まり、橋本左内、横井小楠、西郷隆盛らと交遊し大きな影響を与えた。安政二年の大地震のため江戸小石川の藩邸で圧死した。

〈展示品〉「回天筆力」 東湖先生（和綴）

十月廿九日 御通事列 水戸御用調役会津恒蔵奥御右筆・・・と始まり「六月五日朝四ツ時（刻）世子御誕生」で終わる。ある頁には「廿六日黒船東海二見ユ二三里ノ處ト云」とある。

① 蘇峰立像

〈展示品〉「蘇峰立像」川端龍子画（軸物）

蘇峰米寿の祝いとして昭和二十五年に有志が川端龍子に頼み描いてもらったもの。

「蘇峰立像」の他に左記の資料も展示した。

土方久元（一八三三〜一九一八 天保四〜大正七）土佐

幕末の志士、明治時代の政治家。号泰山。土佐藩士土方久用の子。尊攘運動に挺身。特に（七脚落ち）に力を尽くし、三条実美の厚い信任を受けた。また倒幕運動に参画し、中岡慎太郎・田中光頭や坂本龍馬らと共に連係し、薩長連合実現に尽力した。維新後江戸府判事、東京府判事などをへて、明治四年太政官出仕。のち宮中顧問官、枢密顧問官に就任した。

〈展示品〉土方久元の書（軸物）

春山一詠掃無塵須識黔黎仰慕真緑樹陰中紅點々数家
旗彰日章新 庵従 泰山 龍駕登見山途中処見

参考文献

- ・『コンサイス日本人名事典(第4版)』平成十三年発行 (株)三省堂
- ・『近世日本国民史』徳富猪一郎著 昭和四十一年 時事通信社
- ・『蘇翁感銘録』徳富猪一郎著 昭和十九年 (株)宝雲舎
- ・『我が交遊録』徳富猪一郎著 昭和十三年 中央公論社
- ・『三代人物史』徳富蘇峯著 昭和四十六年 読売新聞社
- ・『第一人物随録』徳富猪一郎著 大正十五年 民友社
- ・『蘇峰と「近世日本国民史」大記者の「修史事業」』杉原志啓著 平成七年 都市出版株式会社
- ・『蘇峰自伝』徳富猪一郎著 昭和十年 中央公論社
- ・『熊本県人物誌』荒木精之著 昭和三十四年 日本談義社
- ・『近現代日本女性人名事典』近現代日本女性人名事典編集委員会編 平成十三年 ドメス出版

蘇峰堂だより

- ① 昨年三月、テレビ東京「開運!なんでも鑑定団」の出張鑑定イン二宮で当記念館が紹介されました。美術鑑定士・中島誠之助氏と安河内真実氏が来館され、二階展示室の川端龍子描く「蘇峰立像」の前で撮影が行われました。
- ② 徳富蘇峰著『終戦後日記「頑蘇夢物語」』全四巻(講談社)が刊行されました。
- ③ 蘇峰の六女・矢野鶴子さんが九月十日 百一歳でお亡くなりになりました。蘇峰・蘆花のことをお話くださる時の凛としたお姿が思い出されます。ご冥福をお祈りいたします。
- ④ 昨年十月六日(土) 山中湖文学の森「徳富蘇峰館」で催された「徳富蘇峰没後五十年記念デイスカッション」に当記念館職員も出席しました。館長の徳富敬太郎氏のご挨拶や、杉原志啓・梶田明宏・澤田次郎 三人の先生方を講師に行われたデイスカッションはとても興味深く、有益でした。
- ⑤ 徳富蘇峰の命日である昨年十一月二日(金) 杉崎敬之氏がご来館くださり、氏がまとめられた『近世日本国民史研究ノート』全三十八冊をこ

寄贈いただきました。この三十八冊の研究ノートは、十九年前に杉崎氏が記念館を初めて訪れてから『近世日本国民史』を読み始めて、完読しまとめられたものです。貴重な資料として記念館に大切に保存し、有効に活用したいと思います。

- ⑥ NHK山形放送局制作のドキュメント「世界は彼を“平和の精神”と呼んだ」が放送されました。これは常設国際裁判所長をつとめた山形出身の安達峰一郎を取り上げた番組で、徳富蘇峰宛の安達峰一郎書簡が紹介されました。
- ⑦ 二宮図書館発行の「図書館だより」第二十七号で徳富蘇峰記念館が紹介され、三十号では、「二宮ゆかりの人物」として記念館設立者の塩崎彦市が紹介されました。その関連の展示として、二宮図書館の「地域資料コーナー」で塩崎彦市が取り上げられ、塩崎宛徳富蘇峰書簡をはじめ、塩崎と交友のあつた棟方志功や川田順が塩崎に宛てた直筆書簡・葉書が展示されています。(平成二〇年一月五日〜三月末まで)
- ⑧ 資料を読むにあたり、茅ヶ崎「塵外館」(古文書を読む会)の方々にはいつもながらのご協力をいただきました。

徳富蘇峰記念館案内

- 開館日 月・水・金曜日
- 〈特別開館日〉 2月(梅の季節)は 土・日曜日も開館
- 〈特別開館日〉 年末・年始1週間と 8月の第3・4週
- 開館時間 午前10時〜午後4時
- 入館料 大人 500円
中高校生 200円
- 〈団体割引〉20名以上 一割引 450円

平成二十年二月十八日発行

編集 高野 静子
宮崎 松代
和田 千枝

発行者 竹越 起一

発行所 (財)徳富蘇峰記念塩崎財団
〒510-2333 神奈川県中郡二宮町二宮六〇五

TEL 〇四六三三七一一〇二六六
FAX 〇四六三三七一一〇六七七

ホームページ <http://www.2ocn.ne.jp/~tscho/>
E-mail: tscho@peachocn.ne.jp